

九州和牛に関する研究

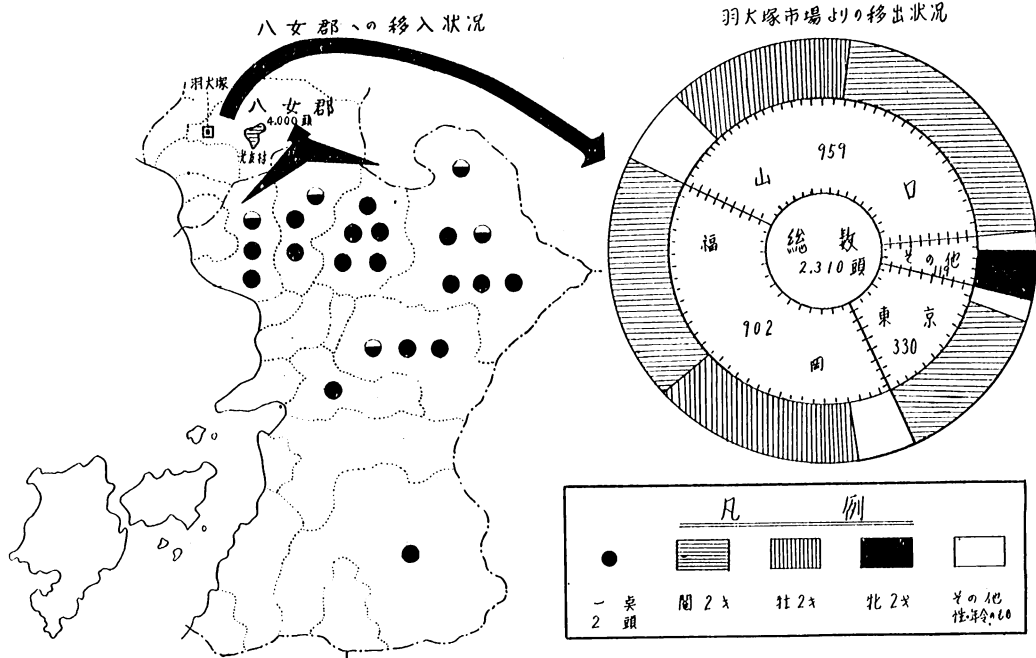
第5報 福岡県筑後地域における褐牛育成について(概要)

川 関 巖*・徳 田 信 久*

KAWASEKI, I. & TOKUDA, N. On the Japanese Cattle in Kyushu. V. Raising the Japanese Brown Cattle in Chikugo Region, Fukuoka Prefecture (Summary)

福岡県筑後地域は肥後の褐牛産の最大の顧客先であるが、昭和28年度における八女郡への移入及び羽犬塚市場よりの移出の概況は、図の通りである。なお同

地域における褐牛育成の農業経営内部における意義を、八女郡光友村について、30戸の戸別聴取調査を行つて究明したが、その成績の概要は次の通りである。



1) 産業組合の役牛預託台帳によつて、年次別の育成状況を見れば、各年度とも、生後4~8ヶ月のものを購入し、10~14ヶ月間育成兼使役した後、毎年12月~2月に販売して新しいものと入替えるものが大部分である。性・資質別には牛価が上昇すれば牝または資質良好のものが増加し、反対に牛価が下落すれば閹(去勢片)及び牝、一般に資質不良のものが多くなる傾向が見られる。販売先別には昭和15年頃には県内向(黒牛を含む)が多かつたが、昭和23年以降は東京方面への移出が大部分を占めている。

2) 役利用については、米麦作の耕耘整地を主とし年間30日前後使役するのが普通であるが、生後12~18ヶ月程度の若齢牛の使役が農業生産力を阻害しないかとの懸念は、土質・水利に恵まれ毎年川泥を採取施用する等の好条件をもつ当村では心配ない様である。

3) 堆肥肥は一般に糞1頭分の生産量で略々必要量を賄い得ておる様であり、不足分は豚・細羊・鶏等の

中小家畜で補つているものもある。糞2頭または成牛1頭を飼養するよりも、この様な用畜の併飼の方向が望ましいと思われる。但し堆肥舎を持たぬ農家が30戸中19戸あり、ぜひとも堆肥舎の設置が望ましい。

4) 飼養所得については、牛価の変動に左右されること大であり、昭和15年には購入価額の15割の粗所得(追銭)を得た事例もあるが、概して1~2割が普通であり、農業所得に占める割合は3~5%程度で問題とするに足らず、農家自身にも特に飼養所得の増大を望む声は少い様である。

5) 飼料は一般に自給を旨としており、かなり窮屈である。部落によつては殆んど年中山草を利用するものもあるが、畦畔草の利用はパラチオン剤使用の影響で驚く程少く、稲わらと蔬菜屑が粗飼料の主体をなし、これに自給の糠麩類と、農繁期用に稷麦2俵を給与するのが普通である。これが成畜の半量の飼料で足る仔畜の育成兼使役が旧来当地域に行われる主要因と思われる。

*九州農業試験場